

古文書に残る道東厚岸での浜ことば

一池田家文書『順蔵日記』に見えることばづかい一

見野 久幸

はじめに

『順蔵日記』（厚岸町教育委員会 平成 13（2001）年 3 月）との出会いは、平成 14 年（2002）に厚岸町で方言調査を行った時である。原本を見ることは出来なかったが、高嶋弘志氏（当時釧路公立大学）のこの翻刻書^{*注1}から、強い訛りが交じって書かれており、筆者池田順蔵の日常のことばづかいが反映していて、明治後期の厚岸での方言の考察に価値のある資料であると判断した。

池田家は、場所請負制度のもとで栄えた下北半島の大畑村の出で、蝦夷地出稼ぎで成功した家である。明治 2 年（1869）場所請負制の廃止を機に、順蔵の父池田儀右衛門は大畑から厚岸に定住している。順蔵は、嘉永 5 年（1852）大畑村で生まれ、言語形成期を過ごし、明治 7 年（1874）22 歳で結婚を機に厚岸に移住している。

順蔵は、儀右衛門の長男で、厚岸町末広で昆布採取と豆腐製造を営んでいた。『順蔵日記』は、明治 41 年（1908）から明治 44 年（1911）までの 4 年間のその日々の営みを記したもので、順蔵 56 歳から 60 歳迄の日記である。

そこで、原本に当たることができないことから、高嶋弘志氏の翻刻に拠り考察する。全資料では膨大な量になるため、順蔵の発音（音韻）については明治 41 年 12 月 30 日から明治 42 年 11 月 5 日迄の「明治四十二年 日誌簿」の 1 年間を考察の対象とし、方言語彙中の「我等」では 4 年間の全資料を対象として扱う。

1. 順蔵のことばの訛りの諸相

「明治四十二年 日誌簿」に見られる順蔵のことばの訛りは次のようである。

〔注記：_____は一語を、____は助詞を、末尾の数字は用例数を表す。〕

1. /i/（い）→ /e/（え）

- 01 アエタマ風 23 02 エツゴ（苺）1 03 エヂゴ（苺）1
04 アエ下風 3 05 アエスモ風 1 06 エチゴ（苺）3
07 サラへ集メ 1 08 水取りトエ拵治ス 1 09 直ニサラへ干ス 1
10 フサ女手伝へ参ル 1 11 サラ（浚）エ上ケデ陸ニ運ヒ置ク 1

2. /e/（え）→ /i/（い）

- 01 揃ヒ。4 02 餅拵ヒ廻ス 1 03 詔ヒ遣ス 1 04 詔ヒ拵へ 1
05 詔ヒ置キ、1

3. /u/（う）→ /e/（え）

- 01 買へ。1 02 大根畑ヲ拵へ。1 03 詔ヒ拵へ。1

4. /k i/（き）→ /k u/（く）

- 01 鯨沖上ナクニ付戻り 1 02 我紅連焼ク仕舞 1

5. /k u/（く）→ /k i/（き）

- 01 一行キ。31 ↔共通語 [終止] 一行ク。15
02 芋畑ノ垣造ニ行キ由。1 03 届キ。2 04 吹キ。1

6. /s i/（し）→ /s u/（す）

- 01 トス女 4 ↔共通語 トシ女 1 02 クスロ（釧路）1
03 当書出ス持行 1 04 食ス居ル 1 05 天気ト相成、浪ナス。1

- 06 ヨス (良)。64 ←→* 共通語 [終止] ヨシ。1 07 咄ス致 1
 08 天気少敷ヨス (良) ニ付 2 *「ヨキニ付」とあるべきところ
 09 アエスモ風 1 10 中野店ニ借用モノ書付ヲ托ス置キ 1
 11 生昆布残ス干ス 1 12 其際遊ヒス居ル 1 13 書直ス差入置キ 1
 14 其咄合ヲ致ス置キ 1 15 三時頃より雑薪割ス仕舞 1
 16 昆布廻スニ付 1 17 一休ヲ致ス居ル 1 18 米廻スニ行ニ付 1
 19 灰廻スニ付 1
7. /s u/ (す) → /s i/ (し)
 01 遣し。23 ←→* 共通語 [終止] 遣ス。8。[連用] 遣シ、1
 02 直ニ遣し処 1
 03 致し。10 ←→* 共通語 [終止] 致ス。3。[連用] 致し、2
8. /t i/ (ち) → /t u/ (つ)
 01 エツゴ 1 02 二時頃ニ雨落ツ集メ 1 03 四時ニ雨落ツ集メ 1
9. /b i/ (び) → /m i/ (み)
 01 猫足ヲ撰ミ。1
10. /b u/ (ぶ) → /m u/ (む)
 01 猫足ヲ撰ム。1
11. /b u/ (ぶ) → /b i/ (び)
 01 妻ハ拾置昆布ヲ干開ケ、前浜ニも運ヒ。5
12. /m i/ (み) → /m u/ (む)
 01 休ム居ル 5 ←→* 共通語 [連用] 休ミ居。1
 02 風呂水ヲ川より汲ムニ行 1 03 大豆ヲ頼ム遣シ 1
13. /m u/ (む) → /m i/ (み)
 01 母宅ニ寄り休ミ。1 ←→共通語 [終止] 休ム。6
14. /m u/ (む) → /m e/ (め)
 01 十二時頃ヨリ伊倉牛松殿ハ枉負来リニ付買求メ。1
15. /r i/ (り) → /r u/ (る)
 01 紅連造ルス 1 02 参る候 1
 03 未タ浪有ル。1 *他は「あり。」とあり、「リ」の音転化と見ておく。
 04 下駄ニ緒造ル建 1 05 外の戸壺枚造ル建テ 1
16. /r u/ (る) → /r i/ (り)
 01 参り。27 ←→共通語 [終止] 参る。5
 02 晩方山林員参りトテ 19 03 大雨降りニ休ム 2
 04 降り。27 *「雨・小雨・大雪・雪・小雪・大雨・霧・大霧一降り。」
 05 泊り。5 *「伯」表記。 06 ナリ (成)。22
 07 一寄り。10 ←→* 共通語 [終止] 一寄る。5
 08 地面ノ咄ありニ付 1 09 □□□五十わアリ由 1
 10 松本店立波氏ヨリ送モノハ下ノ中川浜上り。1
 11 書直ス差入置キ戻り。1 12 白メ負戻り。1
 13 霧降りモ、妻トモハ昆布干スル 1 14 枉負来リニ付買求メ 1
17. /r i/ (り) → /r e/ (れ)
 01 高寺殿ヨリ地租税ノ切符式葉借レ、1 02 妻ハ今朝フサ宅ニメルキ借レ行 1
 03 福野氏ヨリシキ殿借レ、1 04 尚壺呟ヲ借レ、1 05 久保ヨリ借レ、1
 06 品物借レ、1 07 蕨壺束借レ。1 08 留さんニ借レ、1
18. /r e/ (れ) → /r i/ (り)

- 01 南風ニテ天気模様悪敷ナリ (成) トモ、朝風浪有リトモ、田村氏ノ川崎舟及ヒ浜人モ厚岸ヘ米廻ニ行キ 1
- 02 南風ニテ天気模様悪敷ナリトモ、朝風浪有リトモ、田村氏ノ川崎舟及ヒ浜人モ厚岸ヘ米廻ニ行キ 1
- 03 雨模様ニナリ (成) トモ妻豆婦揚ス 1
- 04 大霧降りトモ、母ハ出ル 1
- 05 朝霧アリトモ、皆々昆布干致し 1
- ←→共通語 [已然] ナレトモ 3 スレトモ 1
19. /r e/ (れ) → /r u/ (る)
- 01 小雪降るトモ、鍛冶及宇佐美ノ子供・竹沢トモ三人ニテ厚岸ヘ頼遣し 1
- 02 昆布寄るトモ、我等ハ眼病ノタメ浜不出 1
20. 清音 → 濁音 *本文は濁音でも清音表記がほとんどである。
- 01 夏日サラエ上ケヅ陸ニ運ヒ置ク 1
- 02 鯨式ワグ。1
- 03 エヂゴ (苺) 1
- 04 浜ニテガス上ケ干ス 1
- 05 我浜分ノガスヲ積み 1
- 06 早朝福野浜下ニテガスヲ集メ 1 ←→*拾集カス及猫足ヲ不残干開ケ 清音表記
- 07 ズギ。1
21. 長音 → 短呼
- 01 焼トフ (豆腐) 致し 1 02 米及サト (砂糖) 壱斤買 1
- 03 喪中ノマンジュ (饅頭) 1 04 雪除ケニンズ (人数) ニ出ル 1
22. /z u/ (ず) [直音] → /z y u/ (じゅう) [ヤ行拗音]
- 01 三人ヲ十二時ニマンズユー先返シ 1 *先ず
23. 促音 → /t i/ (ち)
- 01 マチケ 1
24. 入り渡り鼻音 *「返シ」は「帰シ」
- 01 小雪少々降トモ、直ニ晴レ、三人ヲ十二時ニマンズユー先返シ 1 *先ず

順蔵のことばの訛りは以上のようなものである。多くのことばが訛っている。それは下北半島の大畑で身に着けた東北方言、すなわち北奥羽方言によるものであろう。

その訛りを整理すると、次頁の表のようである。語中は単純語、複合語での、語末の「終止」は終止形での、「中止」は連用形で他語へ接続しない場合での、「接続」は他語への接続の場合での訛りである。語末で訛ることが多く、終止するときには比較的多い。そのような中、語末がラ行音で助詞に接続するとき、特に逆接の接続助詞「ども」に接続することばづかいで多く訛っている。順三の訛りの特徴であらうか。

次頁表右に明治期の日本海側余市と小樽での訛りの状況を余市は林家文書の日記^{*注2}、小樽は青山家文書の日記^{*注3}を資料とし、太平洋側厚岸の『順蔵日記』と比較し概観する。余市の日記は明治2年から3年で明治初期、小樽の日記は明治22年から明治28年で明治中期、厚岸の日記は明治42年で明治後期のものである。この3資料により、明治期の日本海側道南方言圏後志地方の余市・小樽と太平洋側厚岸でのことばの訛りの状況を歴史的、地理的に概観することは許されるであらう。その観点から比較すると、明治後期の厚岸の順蔵のことばの訛りは余市・小樽での明治初期から中期にかけての訛りに劣らない強いものであったことがわかる。今でも道東地方では厚岸での方言はことばによっては勢力がある^{*注4}が、明治期には道南方言圏北側の後志地方に劣らなかったことが推測される。

『順蔵日記』に見る 厚岸でのことばの訛り	語 頭	語 中	厚岸 語 末			明治 後期	余市 明治 初期	小樽 明治 中期
			用言：他語への接続の有 無	終 止	中 止	接続：体/用/ 助/助動		
1. /i/ (い) → /e/ (え)	5	29	1		2		○	○
2. /e/ (え) → /i/ (い)		1		1	3		○	○
3. /u/ (う) → /e/ (え)				3			○	
4. /ki/ (き) → /ku/ (く)						2 1/0/1/0	○	○
5. /ku/ (く) → /ki/ (き)				34		1 1/0/0/0	○	○
6. /si/ (し) → /su/ (す)		11	2	65	3	5 0/0/5/0	○	○
7. /su/ (す) → /si/ (し)				33		1 1/0/0/0	○	○
8. /ti/ (ち) → /tu/ (つ)		1			2		○	○
9. /bi/ (び) → /mi/ (み)				1			○	
10. /bu/ (ぶ) → /mu/ (む)				1			○	○
11. _bu_ (ぶ) → /bi/ (び)				1			○	
12. /mi/ (み) → /mu/ (む)		6				1 0/0/1/0	○	
13. /mu/ (む) → /mi/ (み)				1			○	
14. /mu/ (む) → /me/ (め)				1			○	○
15. /ri/ (り) → /ru/ (る)		1		1		1 0/1/0/0	○	○
16. /ru/ (る) → /ri/ (り)				96		25 1/0/24/0	○	○
17. /ri/ (り) → /re/ (れ)		1			4		○	○
18. /re/ (れ) → /ri/ (り)						5 0/0/5/0	○	○
19. /re/ (れ) → /ru/ (る)						2 0/0/2/0	○	○
20. 清音 → 濁音	4	1	2				○	○
21. 長音 → 短呼		1	3				○	○
22. 直音 → ヤ行拗音			1				○	
23. 促音 → /ti/ (ち)		1					○	
24. 入り渡り鼻音		1					○	○

2-1. 順蔵が使っている「われら」

方言語彙では、アエタマ風〔北北西の風〕、五升芋(ごしよいも)〔じゃがいも〕、コッパ〔雑魚〕、マツケ(マチケ)〔綱に鍵爪をつけた昆布を取る道具〕、モッコ〔畚〕など、浜ことば、海岸特有の漁撈用語を使っているが、その中で次の「われら」が使われている。以下はその全用例である。

- 01 我等ハ眼病及腹中悪敷ニ付休居ル。〔明治41年2月8日〕
- 02 我等ハ腕痛ニ付休ム。〔明治41年3月3日〕
- 03 我等妻兩人ニテ瀧ノ下へ銀杏草採ニ出ル。〔明治41年6月29日〕
- 04 我・妻トモ休ミ。我等ハ腕ニ薬用ス。〔明治41年7月26日〕
- 05 妻ハ昆布拾ヒス。我等ハ足痛ニ付、薬用休ム。〔明治41年10月2日〕

06 我等ハ眼病ノタメニ浜不出。妻一人ニテ拾運ヒ干ス。〔明治42年10月23日〕

07 昆布寄ルトモ、我等ハ風邪ニテ寝臥、妻ハ豆婦造ル。〔明治43年4月26日〕

08 大谷ノ妻女立寄り、我等ハ足痛休ム居ル。〔明治44年6月2日〕

これらの「我等」は_____部分より一人称単数であり、複数でないことが分かる。

次の「我等」も文脈からみて一人称単数の「われら」である。

・我等ハ釧路行年始状ヲ書ス。〔明治42年1月3日〕

・妻ハ朝ヨリ紅連餅焚キ、我等ハ大魚ノソボロヲモミ干ス。〔明治42年7月5日〕

一方で「我」も多く使っている。「我等」と「我」との違いは、「我等」は「（他者を意識し）へりくだる気持」を表すことばであることである。

2-2. 順蔵が使っている「われらども」

順蔵は「われらども」ということばも使っており、その全用例は次のようである。

01 我等トモハ厚葉ヲ揃ヒ。〔明治41年11月8日〕

02 我等トモハ昨日ノ仕内ヲ干ス上リタルヲ小家入ス。〔明治42年6月9日〕

03 我等トモハ昨日上ケ置キ昆布ヲふと干シ開ケ、〔明治42年6月16日〕

04 我等トモハ山行き。〔明治43年3月28日〕

05 我等トモハ豆婦揚致ス。〔明治43年5月8日〕

06 我等トモハ一昨日ノ生及仕内ヲ干、〔明治44年6月1日〕

07 我等トモハ灰焼致ス。〔明治44年6月17日〕

08 我等トモハ屑生昆布揃干ス。〔明治44年8月17日〕

先の、順三が使う「我等（われら）」の「ら」が複数を表す接尾語でないことは、このように「我等」の後に複数の接尾語「一ども」がつく言い方をしていることから分かる。

なお、順蔵が使っている複数の接尾語「一ども」の「われらども」以外での使い方は次のようである。

〔明治41年〕

01 トス女・我妻トモ 1例

02 我・妻トモ 19例

03 定吉殿トモ 2例

04 我・源二トモ 1例

05 我・全人トモヲ 1例

06 妻トモ 4例

07 勇太郎トモ 3例

08 我及妻トモ 1例

09 高寺殿トモハ 1例

10 勇及女トモハ 1例

11 キヌ女・キヨ女トモ 1例

12 初殿トモ 1例

13 勇トモ 2例

14 猫足及カストモ 1例

15 源二トモ 1例

16 三蔵殿トモ 2例

17 木村トモ 1例

〔明治42年〕

01 我・妻トモ 23例

02 子供トモ 2例

03 勇太郎トモ 5例

04 妻トモ 5例

05 我等・勇トモ 1例

06 キヨ女トモ 2例

07 大谷ノ妻トモ 1例

08 フサ女トモ 1例

09 利女トモ 1例

10 高寺ノ人トモ 1例

11 妻・子供トモ 1例

12 他人トモ 1例

13 我トモ 1例

14 源二トモ 1例

〔明治43年〕

01 妻トモハ 7例

02 我・妻トモ 5例

03 我・源二トモ 1例

04 妻・源二トモ 1例

05 他人トモ 1例

06 勇・初トモ 1例

〔明治44年〕

01妻トモ 3例

02源二トモ 1例

03我・妻トモ 2例

04フサトモ 1例

05勇太郎トモ 2例

06 初殿トモ 10例

07 キヨ女トモ 1例

08 先生トモ行由 1例

09 加藤トモハ 1例

10 初殿・通太郎トモ 1例

11我トモ 1例

12 他人トモ 1例

13 妻・源二トモ 1例

その中で、明治41年の03・09・12・16、明治44年の06・10に見られるように「一殿」に、明治44年の08に見られるように「先生」に使っている。敬意を表すことばとともに使っている。順蔵には「達」の使用はない。「ども」にはこのような使い方があったのであろうか。また、「われ」の複数は、明治42年の13、明治44年の11に見られように、「我ども」であり、「我等」の使用は見られない。「われども」は複数、「われら」は一人称単数と意識して使っていたあらわれであろう。

3-3. 順蔵が使っている問題の「一ら」

以上から、順蔵の「一ら」と「一ども」の使用は、基本的には「一ら」は一人称単数「我等」の「へりくだる」ことば、「一ども」は複数のことばという認識によって使っているように思われる。その中で、「一ら」の一人称単数以外での使用とも思われるものが次のように見られる。

01 夕方ニ我・妻トモ等ハ寺崎ノ風呂行ス〔明治42年7月27日〕

02 子供等ノ下駄ニ緒造ル建。〔明治42年9月26日〕

03 我今朝薪小割ス。妻等ハ眼ニ付休ム〔明治42年11月1日〕

04 大谷妻・我妻・子供等ハ番外ノ祭礼ニ出ル。〔明治44年10月10日〕

05 今日ハ我等三人ニテ厚岸町へ出ル。〔明治44年12月1日〕

これらの「一等」は、どう理解したらよいのであろうか。01は例示の「ら（など）」であろうか。02、04は複数の「ら」であろうか。しかし複数表現は、明治42年の02に「子供ドモ」とある。03は例示の「ら（など）」でも複数の「ら」でもないであろう。05はこれ以外の「我等」が全て一人称単数の使用であることから、複数の接尾語「ら」ではなく、一人称単数の「一ら」であろう。

05を除いて、01から04が妻、子供での使用であるところをみると、妻、子供を自分側と意識しての一人称単数に準ずる扱いで、「へりくだり」の意識からの使用であろうか。これらは、順蔵特有のことばづかいであろうか。それとも当時こういうことばづかいがあったのであろうか、問題となることばづかいのように思われる。

3. 辞典での「われら」の解説

一人称単数の「われら」が全国的にどうであるかを『日本国語大辞典』により、北海道ではどうであるかを『北海道方言辞典』によって見ると、

イ、『日本国語大辞典』（小学館）の「われら」の解説は、

共通語では、「われら〔代名〕〔1〕自称 ②単数に用いる。われ。わたくし。浮世草子・西鶴織留一五・三「済まぬ時は其女良と我等間夫をいたすと、くだんの誓紙人に見せられては」とあるが、方言では、「対称。複数。おまえたち。山形県米沢。山梨県南巨摩郡。奈良県。高知県香美郡。《わつら》茨城県猿島郡。千葉県。福井県南条郡。三重県南牟婁郡。愛媛県南宇和郡。《わるら》石川県など。」で、二人称複数の使用の解説はあるが、一人称単数での使用の解説はない。

ロ、『北海道方言辞典』（北海道新聞社）の「われら」の解説は、「ワレラ【代】わたした

ち。「あのころはワレはもう5年生ぐらいだった」（豊頃）。文語を口語に用いた例で道内では稀【陸】。〔関連方言〕ワレ。自分。青森（上北）・鳥取・福岡。（古語）われらもえこそ念じはつまじけれ（源氏物語）」で、一人称複数の使用の解説はみられるが、一人称単数での使用の解説はない。なお、「われ」については、「ワレ【代】①わたし。我。」「6年にほらワレが分家になった」（豊頃）②君。二人称の使用は道内では稀。【陸】。〔関連方言〕岩手（南部）。（古語）「御民われ生ける験あり」（万葉集）と解説しており、北海道方言として「われ」が一人称でも二人称でも使われていたことが知られる。

以上、『日本国語大辞典』、『北海道方言辞典』の解説から、一人称単数の「我等」は方言ではなく、共通語と解されていることがわかる。国語辞典の『大辞林』（三省堂 1988.11）、『日本国語大辞典』（講談社 1989.1）、『広辞苑』（岩波書店 1998.11）でも一人称単数の「我等」を記載している。その訳はどの辞典も「わたくし」あるいは「われ」であり、「わたしめ」のような「へりくだり」の訳を示している辞典はない。

4. 文献に見える一人称単数の「われら」

順蔵に見られる一人称単数の「われら」の使用が、歴史的にどうであるかを文献によって見ると次のようである。

イ、上代：『万葉集』

「憶良らは 今は罷らむ 子泣くらむ それその母も 吾を待つらむぞ」

* 詠歌者は憶良であり、「憶良」は「私」で一人称の用法である。

ロ、中古：『源氏物語』

「われらもえこそ念じはつまじけれ」

『宇津保物語』（『新装改訂 新潮国語辞典』）

「このわれらが中将なりし時」〔蔵開 下〕）

『宇津保物語』（『古語大辞典』（小学館））

「われらが子は親にまさるなし」（蔵開・下）。

ハ、中世：『宇治拾遺』（『旺文社 全訳古語辞典』）

「夢は取るといふことのあるなり。この君の御夢、われらに取らせ給へ」

訳：夢は他人の夢を自分の夢として取るということがあるそうだ。この君の御夢を私に取らせてください。

* 「卑下する気持を含む。」の解説あり。

『日葡辞書』（1603）室町期近畿地方

V r e r a . ワレラ（我等）われわれ、または、私。

二、近世：「北条早雲書状」*注5

「関右馬充方の事、名字我等一体に候。」（*原文を書き下し文に）

訳：関右馬充とは名字が私と一体です。

「吉川経家自筆遺言状」*注6

「我等鳥取において御用に罷り立ち候。」（*原文を書き下し文に）

訳：私は鳥取において御役に立とうと思います。

「毛利元就自筆書状」*注7

「我等十一の年、土居に候つるに、」（*原文を書き下し文に）

訳：私が十一歳のとき、土居（猿掛城）に住んでいたのですが、武蔵国多摩郡連光寺村富沢家文書「差出状」*注8

「ぎん義当七ヶ年以前卯年中貴殿方媒人二而、我等妻二貰請」

（*原文を書き下し文にする。）

訳：ぎんの事、7年前の万延2年貴方が仲人で、私の妻にし、
『浮世草子』・西鶴織留一五・三（岩波古典文学大系）

「済まぬ時は其女良と我等間夫をいたすと、くだんの誓紙人に見せられては」

ホ、近代：『宮本左門之助武勇伝』（岡田霞船 1887年）

*注9 「御息女我等如きと浮名の立ば生涯か身を過つべし」

『佐野治郎左衛門伝』（著者未詳 1889年）

「治郎左衛門は我等も男なり何しに偽りを云べき」

『吉田物語 下』（杉岡就房 1898年）。

「此度は我等一人にて」

と、一人称単数の「われら」は上代から近代にかけて使われてきていたことばであることがわかる。他者が意識にあり、「へりくだり」の使用である。イの「憶良」は詠歌者自身であり、ロ、ハ、そしてニの浮世草子、ホは会話での使用であることから、上代から近代にかけて一人称単数の「われら」は話ことば（口頭語）としても使われていたことがわかる。近世での書状4通も話ことばが反映されているものと思われる。

文献では西日本で早くから使われ、東日本では近世に見えている。一人称単数の「われら」は西日本から東日本へと伝播し全国的に使われていたことばと見ることができる。

まとめ

厚岸町の池田家文書『順蔵日記』を資料として筆者順蔵のことばの訛りの様子、それを通して当時の厚岸の方言の状況、そして順蔵が使っている「我等」について考察した。

順蔵のことばの訛りは強い。それは下北半島の大畑で言語形成期を過ごし日常生活の中で身に着けた北奥羽方言によるものであろう。その訛りは、語末で多く表れ、終止するときと比較的多い。そのような中、語末のラ行音のことばが助詞に接続するとき、特に逆接の「ども」に接続するときに多く訛っている。順蔵の訛りの特徴であろうか。同じ北奥羽方言でも太平洋側と日本海側では歴史的、地理的に違いもありそうで、個々のことばの事象について今後の探究が期待される。

順蔵の訛りの強さの程度を明治初期から中期の日本海側余市と小樽での訛りの状況と比較し、歴史的、地理的に概観すると、明治後期の厚岸の順蔵のことばの訛りは余市・小樽での明治初期から中期にかけての訛りに劣らない強いものである。明治期には厚岸でのことばの訛りは道南方言圏北側の後志地方に劣らない状況であったことが推測される。

順蔵の「我等」は、一人称単数で使っており、「（他者を意識し）へりくだる気持」を表わしている。複数を表すことばとしては使っていない。順蔵は、「われ」の複数は「我ども」、「われら」は一人称単数を表すことばと意識して使用していたことがうかがわれる。

『日本国語大辞典』、『北海道方言辞典』、そして他の辞典の解説から、一人称単数の「我等」は方言でなく共通語と解されていることがわかる。訳はどの辞典も「わたくし」あるいは「われ」であり、「わたしめ」のような「へりくだり」の訳をしている辞典はない。

歴史的文献から、一人称単数の「我等」は上代から近代にかけて使われてきたことがわかる。他者が意識にあり、「へりくだり」の気持ちを表し、話ことばとしても使われていたことばである。文献では西日本に早くから見えている。西日本から東日本へ伝播し全国的に広まっていたことばのようである。

一人称単数の「われら」は、北海道では、日本海側の北奥羽方言の影響の強い道南地方、そして道南方言圏では使用が見られず、太平洋側の厚岸に見えている。厚岸には下北半島の大畑から明治後期に池田順蔵により持ち込まれているが、その広がり是不明である。解明には他の海岸部や内陸部を含めた今後の調査が必要である。

参考文献

- *注1 厚岸町の池田家文書『順蔵日記』は、高嶋弘志氏の翻刻・解説で平成13年3月厚岸町教育委員会から発行された。明治41年から明治44年までの池田順蔵の日記で、「明治四十一年日誌簿」「明治四十二年 日誌簿」「明治四十三年 日記簿」「明治四十四年 日誌簿」からなっている。
- *注2 資料は林家文書『明治二己巳歳日記』〔筆者は林源左衛門（松前生れ）先祖は塩越（現在の秋田県にかほ市象潟）より〕
古文書に見られる明治初期の北海道方言（音韻）」（見野久幸『北海道方言研究会会報90号』北海道方言研究会 2013.12）に使用の資料
資料は、林家文書『明治三年庚午年 日記』『明治三年庚午 漁場見廻日記』〔筆者は林源左衛門（松前生れ）先祖は塩越（現在の秋田県にかほ市象潟）より〕
「明治三年庚午日記」「明治三年庚午漁場見廻日記」に見られる方言」（見野久幸『林家文書解説と研究6号』林家文書解説ボランティアの会 2021.11.）に使用の資料
- *注3 資料は青山家文書『青山漁場日記』〔筆者は青山政吉（現在の山形県遊佐より）〕
「鯨網元が残した文書に見られる方言（音韻）」（見野久幸『北海道方言研究会会報87号』北海道方言研究会 2010.12）に使用の資料
- *注4 『北海道方言と東北・新潟方言の地理的・年齢的勢力分布と動態（2）』（見野久幸 CD-R 媒体 2023.2 ）
- *注5 『戦国武将の手紙を読む』（小和田哲男 中公新書 2010.11.25）
- *注6 『戦国武将の手紙を読む』（小和田哲男 中公新書 2010.11.25）
- *注7 『戦国武将の手紙を読む』（小和田哲男 中公新書 2010.11.25）
- *注8 『古文書を読む』（古賀弘幸 幻冬舎 2020.6.25）
- *注9 国立国会図書館デジタルコレクションからの引用で、『地方史のつむぎ方』（尚学社 2024.1）などの著者である地方史研究家山本竜也氏の教えによる。